

# 福岡大学医学会ニュース

第30号

福岡大学医学会

福岡市城南区七隈

福岡大学医学部内

印刷 福岡印刷株式会社

福岡市博多区東那珂一丁目10-15

## カリキュラムの

### 第二次改正にあたって

医学部長 松岡雄治



福岡大学医学部が発足したのが昭和四十七年で、昭和五十六年の新入生から大幅に改正された新しいカリキュラム（以下第一次改正という）による教育が開始され、現在に及んでいる。来年度（平成七年）の新入生から更に新しく改正されたカリキュラム（以下第二次改正という）に移行することになるので、最初のカリキュラムでの教育が九年間、現行のカリキュラムでの教育が十三年間実施されたことになる。

今回の第二次改正は当然のことながら第一次改正と無関係ではない。第一次改正で意図しながら、思った程の改善効果が現れなかった部分の手直しが必要とされる。しかし第二次改正の直接の引き金となったのは大学設置基準の大綱化、それに基づく医学進歩課程の廃止、週休二日制の導入など外的教育環境の変化である。

争いという言葉に象徴される日本の中学・高校教育のゆがみやひずみをもたらすものと医学教育計画が直接真正面から対峙せざるを得ないことになる。ここで、第一次改正に際し私達基礎医学担当者もみな等しく体験したことを思い出す。それはそれまで三年次に講義していた同じ内容が二年次に移しただけで著しく理解の程度が悪くなったという事実である。これは学生の質が落ちた訳でも、基礎知識の修得が不十分になった訳でもなく、問題は専門教育に対する心がまえの欠如、医学教育に対するレセプターの欠如の結果に外ならない。その最も端的な現れが学生の授業態度の悪さである。

一、二年次における専門科目の講義で担当の先生から毎回毎回どなられ締めあげられて、三、四年次でやっと医学部生らしい授業態度に落ちこんでいくのが現実である。ひるがえって考え直してみると、中学時代からの、あるいはもっと以前からの長い長い受験勉強と、偏差値偏重に基づく人間のランク付け、その最終的な結論としての入学試験をクリアしたばかりの学生に、直ちに引き続き、医学の勉強を命がけでやれと言っても、もともと無理な注文なのかもわからない。それだけ現在の日本の中学・高校教育のゆがみやひずみの病根が根深いということであろう。少々のearly exposureの試みで十分な動機づけが出来るほど根の浅いものではないと見てよい。カリキュラムの改正のみでなく、福大医学部における医学教育の計画と実施を考えた際の最も根本的な問題がこの問題すなわち、いかに早い時期から本気でやる気にさせるかの問題のようである。

今回の第二次改正に際しては、次の点が考慮されている。一、一般教養科目と専門科目の同時進行といういわゆる楔型カリキュラムをやめ、二年次以降は完全に専門教育のみにし、けじめをはっきりさせた。二、なるべく講義科目を細分化せず包括的な科目にした。三、講義担当者の数をできるだけ少なくしたい。細切れ、寄せ集めの講義が、unratedカリキュラムでないことを徹底させたい。四、できるだけ主任教授の講義時間を多くしたい。特に総論の講義は主に主任教授にお願いしたい。五、具体的なカリキュラムの構成については教務委員から示される筈であるが、改正の大部分はこれからの作業である。教育の根本、要諦はアジェンダだと思われ。現代の医学は知識、技術の伝授のみで済ませアジェンダなしには不可能なほど膨大なものとなっている。要は如何にアジェンダしやすいうカリキュラムを作り、学生自身にやる気を出させ、如何にして肉をつけ血を通わせるかである。皆様の衆知を集め、より良いカリキュラムが出来ることを期待している。

## 新しい医学部

### カリキュラムが始まる

教務委員 吉田稔



平成三年二月の大学審議会による「大学教育の改善について」の答申には「大学設置基準の大綱化が省令として出され、全国の各医学部、医科大学では医学進歩課程を廃止して六年一貫教育としての医学教育を行うことが出来るようになった。」

この基本方針に従って、福岡大学医学部でもカリキュラムの手直しが検討され始めたが、まず全学的に週休二日制が導入されたことをうけ、他学部とも歩調を合わせ週六日の講義を五日間に行うようにするために、一講義単位の時間短縮が行われた。

そして平成七年度より新カリキュラムへ移行させるための具体的な作業が着々と進められて来た。その過程において、いくつかの課題が浮き上った。第一に、従来の一般教育科目（教養科目に相当）といわれていた共通教育科目をどのように組み合わせるか。第二にM1のみならずM2でも行われていた人類学、数学、物理学、化学、生物学などの基礎教育科目をどのようにするか。第三にM3、M4での基礎医学、臨床医学総論、社会医学総論、臨床各科の講義は現行の時間配分、スタイルで良いのか。第四に、M5、M6での臨床実習(BSL)や総括講義、各科試験、国試対策についての現状をどのように考え対処するか、などである。

な目標は、本学の教育制度専門部会（大学院、学部の充実について）の最終報告（医学部にも述べられているように「医師としての基本知識の修得、すなわち医師国家試験に合格させる」と同時に「医学が生命ある人間相手の実学であることを理解させ、豊かな教養と生命倫理の体得を目指す」とである。

このように人間性豊かな正しい臨床医を育成することが卒前教育の基本的な姿勢であることは当然であるが、現実問題としては、医師国家試験に合格出来るようにすること、つまり、本学卒業生の国試合格を如何にして効率よく上げることが出来るか、そのために何か現時点で工夫すべきものはないかをまず考えることも大切である。

そこで、新カリキュラム改訂に先立ち、平成六年度よりM6での国試対策の一環として、現行の各科総括講義、臨床各科試験の組立、見直しを考えた。従来の方式を一部改め、各科の総括のまとめ講義に引き続き、それぞれM6各科試験を行い両者を連結させたこと、更に、これまで夏休み前二回、後二回の四回（四日）に分割して行われていた各科試験日を夏休み前後、各三回の計六回（六日）と試験日を増やし、一日の試験科目数を少なくし、各試験日の間隔日数にも配慮した。また結論的なことを述べる段階ではないが、例年に比較して学内国試試験の成績がまずまずの成果であり、最終的にも好結果が得られることを期待している。

ワークショップ（平成五年九月）でも取り上げられ討議が重ねられて来た。更にその前後の医学部カリキュラム検討小委員会での検討結果をもふまえて、第十九回ワークショップ（平成六年六月二十九日）では試案が提出され、新カリキュラム原案の骨子が出来上がった。

その要点をあげると、①六年一貫教育の基本方針に従い、従来の「くさび型」カリキュラムを廃止し、共通教育科目をM1の一年間で全て終了させる。②M2以降は医学部サイドでの教育のみとし、基礎教育科目としては医学英語のみを残し、専門教育科目である基礎医学科目に集中する。同時に医学教育に対する心がまえ、将来医療、医学に携わるプロになるという自覚と、そのためのやる気を出させるため早い時期から植えつけるためのearly exposure（M1医学概論など）を行う。③全体として、少しでもゆとりのあるカリキュラムの考案から過密傾向にあるM3での専門教育科目の一部（病理学総論、放射線基礎医学）をM2に移す。更に可能な限り、講義を四限目までとし、五限目は行わない、などである。

次は、M2以降の専門教育科目についての新しいカリキュラムであるが、これは全学的に新しい独自のカリキュラムを作り上げるには、場合によっては各科目の時間数の再配分、見直し、科目の再編成や統合も必要となるかも知れない。またしばしば問題とされて来た。その中にはM3での臨床医学総論、社会医学総論についての再検討、M3、M4にまたがる一部の臨床各科の講義の取り扱い、共通的なインテグレイテッド・

この新カリキュラム改訂については九学部からなる全学の教務委員会、共通教育委員会で数回に亘り検討されて来た。その中で医学部教務委員として、特にM1において共通教育科目を終了させるという医学部案について、その提案理由と概要について説明して来た。また、その間に理学部担当者の会議（平成六年九月十二日）や人文学部共通教育連絡会議（平成六年十月三日）にも出席し、医学部の特殊性と新M1カリキュラム案

を中心に説明し理解が得られるように努めた。このようにして関係各位の協力により、先の基本方針に従っての新カリキュラムが出来上がった。これで、六年一貫医学教育の入口であるM1とまだ完全であるとは言えないが、出口のM6のカリキュラムの骨格が出来上がったことになる。

限られた年限、時間数でより効率的に教育効果があげられる新しい独自のカリキュラムを作り上げるには、場合によっては各科目の時間数の再配分、見直し、科目の再編成や統合も必要となるかも知れない。またしばしば問題とされて来た基礎医学と臨床医学のかかわり方、その必然性、連続性についても十分考えながら、よりよい新カリキュラムが出来上がることを期待したい。



## 第二十一回医学部慰霊祭



第二十一回福岡大学医学部慰霊祭は、御遺族名が参列し、平成六年十月二十二日（土）午後二時から福岡畜場において厳粛に執り行われました。今回祀られた霊位は、学生の医学教育の目的で、正常解剖のために献体された三十四柱、病院で死去されて病因究明のために病理解剖をご承諾頂いた百三十三柱、合わせて百六十七柱でした。献灯献花の後、厳粛な雰囲気につつまれて慰霊祭は進行し、松岡雄治医学部長は祭詞の中で、医学の発展のため欠くことのできない解剖に「献体頂いた霊位とその遺族、さらに、ご協力を頂いた各種関係機関に敬意と謝意を表されたい」とも「御霊位に對しましては、日々花を供え、香を断つことなく、敬意と感謝の念を捧げているものではあります。本日ここに一堂に会し、皆様方の崇高な御意志を今一度思い起こして、今後益々、勉学、研究に励み、人類の幸福と福祉に貢献できますよう努力することを誠意お誓い致します」と新たな誓いを披瀝されました。

# 看護学校の現況と展望

福岡大学附属看護専門学校

校長 古川 達雄



しかしその間には、看護婦の技術・情報をもった専門職として位置づけられていく外部環境は著しく変容してきました。現在では、医療全体についての情報や技術が高度・膨大かつ多様になり、この変容に対応するために、関係する各専門職が医療チームを組んでお互いに協力し、全体として良き機能しながら患者に対応してゆくようになってきました。そのため医師には高度医療に対応する高い知識と技術を持つとともに、チームを引っ張ってゆく厚みのある人間性が求められるようになってきました。

福岡大学附属看護学校は、本学における昭和四十七年度の医学部の増設、四十八年度の福岡大病院の開設に伴い、五十年に設立されました。平成七年度には創立二十一周年を迎えることになりました。その間卒業生の多くが本大病院および筑紫病院に勤務して中核となり、患者への優しくまた適切な対応は、私自身の二回にわたる入院加療の経験を含め、高い評価を受けています。

## 教室紹介

### 福岡大学解剖学第二

当教室は、昭和四十七年の医学部発足と同時に開設された。以来、初代三好萬佐行教授のもとで、教育・研究活動を行ってきた。現在当教室には、三好萬佐行教授、平成六年四月に福岡歯科大学より赴任された上原清子助教、柳瀬圭史助教、小柳緑助手、金丸圭治助手(人間生物系総研)、田中陽子助手、河辺保次・嶋田里香教育技術職員、他、三名の大学院生・研究生が在籍している。昭和五十八年、東京大学退官後当教室へ来られた山田英智教授は、平成五年本学を退官された。学位取得のために当教室で研究・論文作成をされた先生方は、これまでに二十名以上になり、現在

は各方面で活躍中である。教育の面では、医学部一年次の人体構造概観で人体を構成する各組織・器官の構造についての講義を分担している。続く二年次の解剖学では、さらに詳細な内容の講義と、光学顕微鏡を用いた実習が全教育職員の協力により行なわれている。また、三年次の医学概論演習では、電子顕微鏡を使用して実際に写真撮影を行い、それまでの基礎知識に加えてミクロの世界に対する好奇心を覚悟してもらえればと考えている。

研究活動の面では、リンパ系各器官の微細構造を中心に、呼吸器系・泌尿器系・循環器系各器官における膠原線維及び弾性線維の微

細配列、消化管上皮細胞の三次元的構築の解明などの形態学的探究と共に、その形態と機能との関連について、興味深い研究結果を発表している。今後の課題として、共焦点レーザー顕微鏡や分光電子顕微鏡を併用することにより、これらの研究を一步押し進めたいと考えている。

部長病院院長会議において、遠山文部省高等教育長は、「申すまでもなく看護婦の重要性はますます大きくなり、医師と看護婦は医療を担う車の両輪であることを再認識しています。平成四年に、看護婦等の人材確保の促進に関する法律が制定されたこともあり、国公私立を通じ看護系大学の設置が急速に進んでまいりました。これにより平成三年度には十一校で、六年度には三十一校となり、減少という厳しい実情に對し、平成七年度入試から二つの対応をとりました。すなわち従来の筆記試験によって一次合格者を決めて数をしぼり二次試験として面接および適性検査を行い最終合格者を決定してまいりました。しかし今回より入試を一回のみとし、志願者全員に対して前日筆記試験、翌日面接および適性検査を行って合格者を決めることとしました。他の変更としては、従来は数学のIおよびIIを行っていましたが、近隣の全ての看護学校と同様に数学Iのみとしました。その結果本年度の志願者は予測以上に増加し、六〇〇名近くに達するものとなりました。このような数の増加はむしろ喜ぶべきですが、この数は近隣の国立医療センターや日赤の看護学校に近いもので、入試の変更によってこれら近隣学校への志願者が本校へも併願していることを示しています。

実際に今までの入試における最終の二次合格者の内本校に入学する者は、志願者が二〇〇名以下と減少した昨年のみは例外として五〇〇名をやや越しましたが、他の年では全て最低三〇〇名、最高五〇〇名で、その行く先を確認し、卒業生との2/3位が看護系大学、残り近隣の看護学校に進学している実情にあります。

看護系の大学化については各大学の関心も強く、既に多くの大学に設立され、さらに急速に増加しつつあります。しかも平成六年度の全国医学

部長病院院長会議において、遠山文部省高等教育長は、「申すまでもなく看護婦の重要性はますます大きくなり、医師と看護婦は医療を担う車の両輪であることを再認識しています。平成四年に、看護婦等の人材確保の促進に関する法律が制定されたこともあり、国公私立を通じ看護系大学の設置が急速に進んでまいりました。これにより平成三年度には十一校で、六年度には三十一校となり、減少という厳しい実情に對し、平成七年度入試から二つの対応をとりました。すなわち従来の筆記試験によって一次合格者を決めて数をしぼり二次試験として面接および適性検査を行い最終合格者を決定してまいりました。しかし今回より入試を一回のみとし、志願者全員に対して前日筆記試験、翌日面接および適性検査を行って合格者を決めることとしました。他の変更としては、従来は数学のIおよびIIを行っていましたが、近隣の全ての看護学校と同様に数学Iのみとしました。その結果本年度の志願者は予測以上に増加し、六〇〇名近くに達するものとなりました。このような数の増加はむしろ喜ぶべきですが、この数は近隣の国立医療センターや日赤の看護学校に近いもので、入試の変更によってこれら近隣学校への志願者が本校へも併願していることを示しています。

## 「親心・子心」

外科第一医員 藤木 健弘



早いもので卒業後四年が過ぎ、入局した頃漠然と描いていた「医師」というイメージが、今や少しずつ「外科医」という具体的な目標に変わってきているのを強く感じています。自分の外見は、学生時代・研修医時代・現在と比べて多少肥ったかな?、ぐらいついて何ら変わりないと思っていますが、近頃目指す医師像のイメージだけがどんどん膨らみ、時に空回りしてものかしい事があります。現在、出張先で母校の先輩、後輩と共に仕事をしていますが、皆

目指す医師像について、夜が更けるのも忘れて語り合う事も多いのです。日常の仕事の中で、先輩を見ては数年前の自分の姿に出会ったり、先輩を見ては新たな目標ができた、現在の自分と将来の自分について考えさせられるのです。外科医は十年経ってもまだまだ、十五年経つてもまだまだ、十五年経つてもまだまだ一人前...などと時々話を聞きますが、どの様な医師になるかは、本人の姿勢に加え、一人前になるまでに出会う諸先輩の姿勢に大きく左右されるような気がしています。

自分のこれまでの四年間を振り返ってみると、一年目は、注射一本入れるのも不安で看護婦さんに代わってもらった事もあったし、I-VHやトロッカーを入れる先輩と共に仕事をしていますが、皆

三年目は、外科医が自分を含めて二人という病院へ出張しました。時には、外來で先輩に相談せずに自分の判断で処置を行い、後で報告するとなぜ、エコーを行わなかったのか?、「どうしてその様な皮切にしたのか?」などと、次々と質問がやってきて答えられず、根拠のない自信だけではないんだと痛感させられる事もありました。四年目、現在福岡市内の白十字病院で、同期・先輩・後輩と共に仕事をしています。

時には、後輩と二人で手術をする事もあり、その様な時は不安もありますが、先輩としての意地も芽生えてくるので、後輩に質問されて答えられずこっそり勉強する。まだまだ足りませんが、日々努力中です。

この様に四年間を振り返ってみると、今まで出会ってきた先輩方に多くの事を教えて頂いたんだ、そして今、自分が教えてもらった事を後輩へ伝える立場になってきている事に気付きます。

先輩への提言、あなた方の一挙手一投足は同じ道を歩もうとしている後輩達が見ている事を忘れないで下さい。後輩への提言、あなた達も日々悩み努力していること、それを、それ以上に悩んでくれている先輩達に伝える事を忘れないで下さい。なぜなら、その先輩達も昔はあなた方と同じ気持ちだったのです。「親心・子心」伝わりましたでしょうか.....

## 福岡大学医学紀要 第21巻優秀論文賞 決定!

以下の方々が、福岡大学医学紀要優秀論文賞を受賞し、平成七年二月一日(水)に開催された福岡大学医学会第32回例会で表彰されました。

岩隈 昭夫 (心臓血管外科学)  
論文名「開心術における自己血輸血の有効性とその限界に関する検討」

北城 守文 (泌尿器科学)  
論文名「腎移植における灌流・冷却保存液へのホスホエノールピリン酸の応用」



Dr. Wei He MD and MD Sci.

# 自己紹介

平成六年五月以降に昇格又は就任

法医学教授

影浦 光義



昭和四十一年九州大学大学院修士課程薬学を修了し、同医学部薬学薬品分析化学教室の助手を経て、昭和五十年四月法医学教室の講師として採用されました。以来一貫してGC、およびGC/MSを用い、法医学分野の研究および実務に専念してまいりました。TIAFT(国際法

福島 武雄

昭和四十一年に九州大学医学部を卒業後、聖路加国際病院にて、いわゆるインターン制度最後のインターン生活を



た現状と我が国の遅れを知り、井の中の蛙から抜け出すことができた。「真実を明らかにすることによって、被害者、被疑者および関係者の人権を護る」という目的のため、与えられた試料(体液・体組織)のみから過去(生前)の状況を推し量るといいう職責の重さを認識し、常に目的を見失うことなく職務を遂行したいと思っております。また、本学が世界の福岡大学となるよう法医学分野で努力したいと思っております。今後ともよろしく御指導御鞭撻の程お願い申し上げます。

一年間おくり、九州大学脳神経研究施設外科北村勝俊教授のもとに入室しました。研究は、大学院生として病理学第一講座田中健蔵教授のもとで脳梗塞の発生機序、脳血栓、脳動脈の栄養血管に関するテーマでしたが、大学紛争のさなかで思うにまかせず中断することがたびたびありました。学位修得後、昭和四十八年に専門医試験に合格、同年福岡大学に助手として勤務することになりました。翌四十九年十月より米国に留学、Clinical Fellow として St. Barnabas Medical

内科学第二助教授

出石 宗仁



本籍、出生地は鹿児島で、高校まで過ごしました。昭和四十九年九州大学を卒業後、開設間もない福岡大学病院の第二内科で研修し、翌年は大病院で一年間研修しました。昭和五十二年より福岡大学病院の医師として採用して戴き、今日に至っております。

最初は循環器の中でも心臓病の臨床に興味を持ちました。次に荒川教授の専門領域である高血圧に関する生化学的な研究に興味が出てきて、第一生化学教室で基礎研究の手ほどきを受けたのち、臨床の傍ら高血圧関係の研究をしていきました。昭和五十九年には、米国クリブランドクリニックへ留学させて戴き、そこで二年間、全く臨床を離れた基礎研究に没頭できる時間を得たことは私自身の人生の中では実に貴重な経験でした。

昭和五十二年九州歯科大学卒業後、同大学院(口腔内科学第一講座)へ入学致しました。臨床の傍ら二ホンザルを用い、咬合異常と顎関節との関連性について病理組織学的に検索し、学位記を授かりました。修了後も同講座に特別研究生として残り、一年後より助手として口腔領域の疾患に対する外科的治療を研鑽してまいりました。その間、文部省長期在外研究員としてスイス・バゼル大学口腔顎顔面外科に十月間、米国・テキサス州フォートワース・ジョーンズ・ティクスミス病院口腔外科に二月間、外科的な咬合改善術を中心に口腔顎顔面領域の手術学の基礎と臨床を学んできました。この度、都温彦教授のお招きをいただき、福岡大学の医療の一端を担わせていただく事となりました。患者さんの心を感じる笑顔の絶えない治療と福岡大学の名に恥じない研究、教育を貫徹したいと思っております。どうかよろしく御指導御鞭撻の程、お願い致します。

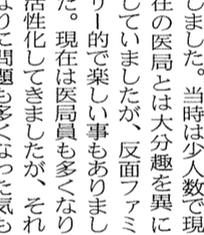
## 教室紹介

### 福岡大学救命救急センター

福岡大学病院救命救急センターは福岡地域の三次救急を担うため、平成四年六月一日に開設されました。当初、脳神経外科学 朝長正道教授が部長を兼任され、講師一名、助手七名、医員十二名、研修医六名、計二十七名の医師と実働ベッド数十四床で運営を開始しました。翌年四月より、田中経一教授が部長に就任され実働ベッド数も三十二床、看護婦数も婦長以下五十三名となり本格的に救急医療に取り組むことになりました。平成五年度にはすでに九〇〇症例以上の重症患者を診療しており、現在の体制では年間約一、〇〇

〇症例が目標となると思われ、現在入院患者の七〇〇は周辺病院・診療所からの紹介によるもので地域の三次救急医療施設としての機能を持っています。開設当初より毎年研修医が三名入局しており、平成六年には救命センターより初めての医師が誕生しました。また大学院にも二名が進学しています。診療体制ですが、重症患者が多く疾患も多岐にわたるため三、四名で主治医チームを構成し治療を行っています。患者さんの病態も複雑で刻々と変化するため、毎朝八時三十分よりカンファレンスを行い病態を

昭和四十九年鹿児島大学医学部卒業、一年間研修後昭和五十年福岡大学一外科に入室しました。当時は少人数で現在の医局とは大分趣を異にしていましたが、反面ファミリー的で楽しい事もありました。現在は医局員も多くなり活性化してきましたが、それなりに問題も多くなった気がします。私自身も胃腸を主として消化管の癌を専門にやってきましたが、特にリンパ流に基づいた合理的で効果的なリンパ節郭清に興味をもち研究を続けてきました。しかし進行癌に対しては手術も限界があります。癌の治療にあたっては化学療法などの補助療法はもとより、患者のQOLや癌告知の問題などを含めた総合的に系統的な治療および対応が必要と痛感している昨今です。さもなくば時代にとり残されていく様な気がするのには私だけでしょうか。外科の若い先生達にもこの様な問題を是非認識してほしいと思っております。今後とも宜しくお願いいたします。



昭和五十二年九州歯科大学卒業後、同大学院(口腔内科学第一講座)へ入学致しました。臨床の傍ら二ホンザルを用い、咬合異常と顎関節との関連性について病理組織学的に検索し、学位記を授かりました。修了後も同講座に特別研究生として残り、一年後より助手として口腔領域の疾患に対する外科的治療を研鑽してまいりました。その間、文部省長期在外研究員としてスイス・バゼル大学口腔顎顔面外科に十月間、米国・テキサス州フォートワース・ジョーンズ・ティクスミス病院口腔外科に二月間、外科的な咬合改善術を中心に口腔顎顔面領域の手術学の基礎と臨床を学んできました。この度、都温彦教授のお招きをいただき、福岡大学の医療の一端を担わせていただく事となりました。患者さんの心を感じる笑顔の絶えない治療と福岡大学の名に恥じない研究、教育を貫徹したいと思っております。どうかよろしく御指導御鞭撻の程、お願い致します。

昭和四十六年に長崎大学医学部を卒業し同第一外科へ入局。二年間の臨床研修を終え、北九州市立八幡病院を皮切りに、愛媛県の市立大州病院、長崎県市立大州病院、大分県立病院で一般外科を研修。五十四年に第一外科に戻り、胸部外科、主として呼吸器、食道を専門に研修。五十五年には気管支形成術、肺動脈再建術に関する研究で学位を取得。五十八年に Toronto General Hospital of Cooper 教授の下に留学し肺移植の研究に従事。世界で初めての肺移植成功例(五十八歳男性)の手術を目

のあたりを見て、いつの日かきつと日本でも思いつつ五十九年六月に帰国。以来、肺移植の実験を続けておりましたが、此度念願かなって、この分野で第一人者である白日教授の下で研究させて頂く機会を得ました。同種移植のみならず異種移植の実験も試み、臨床での臓器移植の開始に向け努力したいと考えています。今後とも何卒宜しくお願い申し上げます。

医師になつて、医学部の多くの部分が学問で成り立っていると考えておりましたが、時が過ぎてみると、何も学問だけが全てではないことが解りました。また、科学であると思っていた臨床医学も、錯覚であり、若さ故の傲慢であったと思えます。

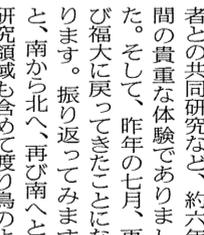


北大卒業後は九大第一内科に入局、故勝木司馬の助教、尾前照雄先生(現国立循環器病センター総長)のもとで臨床内分泌学の勉強をさせて頂きました。尾前先生が、初心を忘れてはいけない、対症療法ではなく、病態生理を考える内科医になりなさい、と何度もおっしゃった言葉は、現在でも忘れることはありません。縁あって創設もない本学第一内科、奥村尚先生のもとに移りました。昭和四十七年、フォルクス・ワグンに乗って小生の汚いアパートを訪ねて下さった奥村先生は私の方向を決定されたお方の一人であります。創設当時は、少人数ではありましたが、夢だけはたらふく食べ、細々ながら内分泌・糖尿病疾患の診療・教育、そして豊富な研究に従事しながら、今日に至っております。その間、二年間、米国テキサス大学の Roger H. Unger 教授のもとで、臨床研究に従事できたことは忘れられない思い出であります。この十一月、神戸で国際糖尿病会議が開催され、当時のフェロー達と時を過ごすことができました。Time flies、時の経つのはいかに早いものかと驚きます。昭和六十三年、人間の科学に少しでも近づきたいと、九州大学健康科学

センターに移り、健康科学会議、ネパール学術調査などにも加わり、医学と違った研究者との共同研究など、約六年間の貴重な体験でありました。そして、昨年の七月、再び福大に戻ってきたことになりました。振り返ってみますと、南から北へ、再び南へと、研究領域も含めて渡り鳥のような生き方でありました。筑紫病院では小さなユニット(二宮、池田助手)ですが、臨床の場を与えて頂きまして、ささやかな始まりは、いつも不安であります。何か新しいものが生まれる予感とともに夢膨らむ思いもいたします。この厳しい現実のなか、なお志の高い若い医師の輪が、波紋のように広がっていくことを願っています。趣味は居眠りしながら聴くロック音楽と、喫茶店で雑多な本を読むことですが、今のところその余裕がありません。

昭和四十四年に北海道大学

昭和五十九年九州大学医学部を卒業後、同大学の第一内科で卒後研修を二年間しました。その後三、四年の予定で、こちらの第一病理学教室に研究をさせて頂いてまいりましたが、八年が過ぎてしまいました。この間、悪性リンパ腫の仕事、とくにATL、EBウイルス、T細胞受容体遺伝子の解析を中心に行なってきました。この間の遺伝子関連の研究の発展には、目をみはるものがあり、PCR, In Situ と興味をもつて仕事をしているうちに、時間が過ぎてしまった感があります。平成四年よりフンボルト大学ミュラーヘルマリンク教授のもとに留学させていただきました。帰国後、がんセンターのホジキン病の中央診断に加えていただき、がんセンターの方々のアクティブなことに感じつつ充実した日々を送っております。今後とも

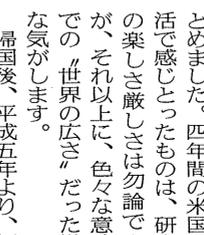


昭和五十九年九州大学医学部を卒業後、同大学の第一内科で卒後研修を二年間しました。その後三、四年の予定で、こちらの第一病理学教室に研究をさせて頂いてまいりましたが、八年が過ぎてしまいました。この間、悪性リンパ腫の仕事、とくにATL、EBウイルス、T細胞受容体遺伝子の解析を中心に行なってきました。この間の遺伝子関連の研究の発展には、目をみはるものがあり、PCR, In Situ と興味をもつて仕事をしているうちに、時間が過ぎてしまった感があります。平成四年よりフンボルト大学ミュラーヘルマリンク教授のもとに留学させていただきました。帰国後、がんセンターのホジキン病の中央診断に加えていただき、がんセンターの方々のアクティブなことに感じつつ充実した日々を送っております。今後とも

昭和五十九年九州大学医学部を卒業後、同大学の第一内科で卒後研修を二年間しました。その後三、四年の予定で、こちらの第一病理学教室に研究をさせて頂いてまいりましたが、八年が過ぎてしまいました。この間、悪性リンパ腫の仕事、とくにATL、EBウイルス、T細胞受容体遺伝子の解析を中心に行なってきました。この間の遺伝子関連の研究の発展には、目をみはるものがあり、PCR, In Situ と興味をもつて仕事をしているうちに、時間が過ぎてしまった感があります。平成四年よりフンボルト大学ミュラーヘルマリンク教授のもとに留学させていただきました。帰国後、がんセンターのホジキン病の中央診断に加えていただき、がんセンターの方々のアクティブなことに感じつつ充実した日々を送っております。今後とも

昭和五十九年九州大学医学部を卒業後、同大学の第一内科で卒後研修を二年間しました。その後三、四年の予定で、こちらの第一病理学教室に研究をさせて頂いてまいりましたが、八年が過ぎてしまいました。この間、悪性リンパ腫の仕事、とくにATL、EBウイルス、T細胞受容体遺伝子の解析を中心に行なってきました。この間の遺伝子関連の研究の発展には、目をみはるものがあり、PCR, In Situ と興味をもつて仕事をしているうちに、時間が過ぎてしまった感があります。平成四年よりフンボルト大学ミュラーヘルマリンク教授のもとに留学させていただきました。帰国後、がんセンターのホジキン病の中央診断に加えていただき、がんセンターの方々のアクティブなことに感じつつ充実した日々を送っております。今後とも

昭和五十九年九州大学医学部を卒業後、同大学の第一内科で卒後研修を二年間しました。その後三、四年の予定で、こちらの第一病理学教室に研究をさせて頂いてまいりましたが、八年が過ぎてしまいました。この間、悪性リンパ腫の仕事、とくにATL、EBウイルス、T細胞受容体遺伝子の解析を中心に行なってきました。この間の遺伝子関連の研究の発展には、目をみはるものがあり、PCR, In Situ と興味をもつて仕事をしているうちに、時間が過ぎてしまった感があります。平成四年よりフンボルト大学ミュラーヘルマリンク教授のもとに留学させていただきました。帰国後、がんセンターのホジキン病の中央診断に加えていただき、がんセンターの方々のアクティブなことに感じつつ充実した日々を送っております。今後とも



昭和五十九年九州大学医学部を卒業後、同大学の第一内科で卒後研修を二年間しました。その後三、四年の予定で、こちらの第一病理学教室に研究をさせて頂いてまいりましたが、八年が過ぎてしまいました。この間、悪性リンパ腫の仕事、とくにATL、EBウイルス、T細胞受容体遺伝子の解析を中心に行なってきました。この間の遺伝子関連の研究の発展には、目をみはるものがあり、PCR, In Situ と興味をもつて仕事をしているうちに、時間が過ぎてしまった感があります。平成四年よりフンボルト大学ミュラーヘルマリンク教授のもとに留学させていただきました。帰国後、がんセンターのホジキン病の中央診断に加えていただき、がんセンターの方々のアクティブなことに感じつつ充実した日々を送っております。今後とも

昭和五十九年九州大学医学部を卒業後、同大学の第一内科で卒後研修を二年間しました。その後三、四年の予定で、こちらの第一病理学教室に研究をさせて頂いてまいりましたが、八年が過ぎてしまいました。この間、悪性リンパ腫の仕事、とくにATL、EBウイルス、T細胞受容体遺伝子の解析を中心に行なってきました。この間の遺伝子関連の研究の発展には、目をみはるものがあり、PCR, In Situ と興味をもつて仕事をしているうちに、時間が過ぎてしまった感があります。平成四年よりフンボルト大学ミュラーヘルマリンク教授のもとに留学させていただきました。帰国後、がんセンターのホジキン病の中央診断に加えていただき、がんセンターの方々のアクティブなことに感じつつ充実した日々を送っております。今後とも

昭和五十九年九州大学医学部を卒業後、同大学の第一内科で卒後研修を二年間しました。その後三、四年の予定で、こちらの第一病理学教室に研究をさせて頂いてまいりましたが、八年が過ぎてしまいました。この間、悪性リンパ腫の仕事、とくにATL、EBウイルス、T細胞受容体遺伝子の解析を中心に行なってきました。この間の遺伝子関連の研究の発展には、目をみはるものがあり、PCR, In Situ と興味をもつて仕事をしているうちに、時間が過ぎてしまった感があります。平成四年よりフンボルト大学ミュラーヘルマリンク教授のもとに留学させていただきました。帰国後、がんセンターのホジキン病の中央診断に加えていただき、がんセンターの方々のアクティブなことに感じつつ充実した日々を送っております。今後とも

# 教室便り

## 学位取得

次の方は、平成六年十一月十一日付で、福岡大学より医学博士を授与された。

豊増 泰介(生理学第二) 論文名「心筋における Calcium paradox の機序に関する研究」

喜多川 昇(生化学第二) 論文名「Study of Pancreatin and Chromogranin A I. Pancreatin Molecular Forms in Normal Human Plasma 2. Production and Secretion of Chromogranin A and Pancreatin by the Human Pancreatic Carcinoma Cell Line QGP-1N on Stimulation of Carbachol」

田 彩彰(病理学第二) 論文名「頸部リンパ節転移性リンパ腫の細胞学的特徴およびEBウイルスとの関係について—他の悪性上皮性腫瘍および炎症性肉芽腫性病変との比較検討—」

梶原 一郎(病理学第二) 論文名「移植腎における単球/マクロファージ・サブセットA Granulocyte Macrophage-Colony Stimulating Factor (GM-CSF) の発現とその検討」

木村 祐三(病理学第二) 論文名「糸球体腎炎増悪因子としての高脂血症の再検討—IgA腎症の場合—」

自見 至郎(病理学第二) 論文名「LDLはIV、V型コレステロール比、III型コラーゲンと陰性荷電を介し多量結合する」

松前 知治(病理学第二) 論文名「糸球体硬化における糖尿病性腎症と巣状糸球体

硬化症での形態学的比較検討」

種田 洋子(法医学) 論文名「死体試料中アミノ酸イオンシグナル関連物質の分析」

立花 克郎(内科学第一) 論文名「Studies on Transdermal Delivery of Insulin by Ultrasound I. Transdermal Delivery of Insulin by Ultrasonic Vibration II. Transdermal Delivery of Insulin to Alloxan-Diabetic Rabbits by Ultrasound Exposure」

豊島 秀夫(内科学第二) 論文名「肺気腫症におけるヘリウム希釈法及び体プレチスモグラフィ法による肺気量分異常と胸部CT所見の関連性」

の深達度診断」 雪竹 浩(小児科学) Ponnou et Enfance

研究業績: Serial measurements of anatomic dead space in premature infants (世界小児呼吸器疾患学会、一九九四年六月、Nice) 大久保久美子

臨床検査医学) 臨床医学振興財団平成六年度研究助成金(地域における臨床医学の振興に寄与する医学研究の助成)

研究業績「インスリン非依存型糖尿病患者におけるグルコナーゼ遺伝子異常」 大久保久美子(代表)

安西慶三、井手口裕、小野順子(分担)

平成六年度厚生科学研究費補助金(高度先進医療研究事業)

研究業績「インスリン非依存型糖尿病における糖代謝関連遺伝子異常の診断システムの確立」

伊藤 正則(精神医学) 論文名「精神分裂病に対する薬理学的効果・限界」

論文名「福岡大学病院における長期追跡調査から—」 友田 靖子(小児科学)

論文名「学童における視覚誘発電位の研究—各種刺激方法による正常値の比較検討—」 池田 稔(泌尿器科学)

論文名「カルシウム含有上部尿路結石症におけるカルシウム代謝に関する検討」 黒木 政秀(生化学第一)

福岡県対がん協会賞 研究業績「高感度腫瘍マーカー測定系の確立と現行キットの見直し」

岡田光男、王 恒治、前田和弘(内科学第一)、八尾恒良(筑紫病院消化器科)、山田豊(筑紫病院病理部)

平成六年度がん研究助成金(福岡県対がん協会) 研究業績「X線、内視鏡および超音波内視鏡による胃癌

しい医療用レーザーならびに白内障手術装置の研究と開発」 平成六年十月二十日から一年(予定)

比嘉 和夫(麻酔科学) ①オーストラリア、Dept. of Anaesthesia and Pain Management Royal North Shore Hospital, University of Sydney ②疼痛治療の臨床的研究(平成六年九月七日〜平成六年十二月二十八日)

③平成六年五月一日〜七月三十一日④生化学第一教室

①所属②目的③期間④訪問先 Bernhard B. Singer

①フライブルク大学免疫生物学研究所研究員②CEA交差抗原の調節と遊離機構の研究

③平成六年五月一日〜七月三十一日④生化学第一教室

福大医学会会員が、執筆した著書または単行本を以下で紹介する。(①書名②発行所③発行年④価格)

▽桂木 猛(薬理学) ①薬物受容体の基礎(高柳一成編)(分担) ②薬業時報社 ③一九九四年、二〇〇〇円

▽岩崎 宏(病理学第一) ①腎肉腫「取扱い規約に沿った腫瘍鑑別診断アトラス腎臓」(分担) ②文光堂 ③一九九四年、三九〇円

▽吉田 稔(内科学第二) ①最新内科学大系 呼吸器疾患3(分担) ②中山書店 ③一九九四年、九三〇円④二九〇〇円

▽佐々木淳(内科学第二) ①すべて役立つ高脂血症治療のチェックポイント(分担) ②医薬ジャーナル ③一九九四年、一〇一〇円④四、一一〇円

▽木下昭生(内科学第二) ①The cardiac renin-angiotensin system (分担) ②Putura Publishing Company Inc. ③一九九四年、\$135

④西園昌久(精神医学) ①Ethics & Child Mental Health (分担) ②Scientific Publication Division ③一九九四年

④西園昌久(精神医学) ①Ethics & Child Mental Health (分担) ②Scientific Publication Division ③一九九四年

## リサーチビクター

## 新刊紹介

▽白日高歩(外科学第二) ①呼吸器疾患—state of the arts (分担) ②医歯薬出版 ③一九九四年、二、〇〇〇円

▽白日高歩(外科学第二) ①臨床医のための診療手技(分担) ②中外医学社 ③一九九四年、五、六五〇円

▽岡 一成(脳神経外科学) ①顕微鏡下手術のための脳神経外科解剖VI (分担) ②サイメッド、パブリケーション社 ③一九九四年、〇〇〇円

▽大島健司(眼科学) ①今日の治療指針 私(私)治療しよ今 Today's Therapy. Vol.36 硝子体混濁 Vitreous Opacity (p.152 only) (分担) ②医学書院 ③一九九四年、七、五一〇円

△西園昌久(精神医学) ①Ethics & Child Mental Health (分担) ②Scientific Publication Division ③一九九四年

△西園昌久(精神医学) ①TREATMENT OF MENTAL DISORDERS (分担) ②American Psychiatric Press, Inc. ③一九九三年

▽満留昭久(小児科学) ①今日の神経疾患治療指針(分担) ②医学書院 ③一九九四年、二、四二〇円

▽白日高歩(外科学第二) ①系統看護学講座「臨床外科看護各論」(分担) ②医学書院 ③一九九四年、一、五七五円

▽白日高歩(外科学第二) ①凶説病態内科講座「呼吸器12」(分担) ②メディカル・ウイユ社 ③一九九四年、二、六六〇円

▽白日高歩(外科学第二) ①呼吸器疾患—state of the arts (分担) ②医歯薬出版 ③一九九四年、二、〇〇〇円

▽白日高歩(外科学第二) ①臨床医のための診療手技(分担) ②中外医学社 ③一九九四年、五、六五〇円

▽岡 一成(脳神経外科学) ①顕微鏡下手術のための脳神経外科解剖VI (分担) ②サイメッド、パブリケーション社 ③一九九四年、〇〇〇円

▽大島健司(眼科学) ①今日の治療指針 私(私)治療しよ今 Today's Therapy. Vol.36 硝子体混濁 Vitreous Opacity (p.152 only) (分担) ②医学書院 ③一九九四年、七、五一〇円

## 来訪

平成6年5月以降、本学医学部または病院を訪れた外国人学者は次のとおり。

- ①所属 ②目的 ③来訪日 ④訪問先
- André G. Kléber ①スイス ベルン大学生理学研究所 教授 ②講演、研究討論 “Cellular loss of K<sup>+</sup> ions in myocardial ischemia and associated ionic changes.” ③1994. 6. 22~6. 25 ④生理学第一教室
- 尹 漢勝 ①Senior Lecturer, Dept. of Pathology, University of Otago, ニュージーランド ②講演 “Aberrant genomic imprinting and human diseases including cancer” ③1994. 7. 15 ④病理学第一教室
- Dr. Toth Tibor ①Head of Department Histopathology Polyclinic and Hospital of Veszprem County ②講演 “Prolonged Blockade of Nitric Oxide(No) Synthesis Induces Focal Glomerular Necrotic(FGN) Lesions in Gravid Rats” ③1994. 5. 25~6. 27 ④病理学第二教室
- Prof. Kim Solez ①Department of Laboratory Medicine and Pathology, University of Alberta ②講演 “International Standardization of the Diagnosis of Rejection and Allied Conditions in the Transplanted Kidney” ③1994. 6. 4 ④病理学第二教室
- Saul Tuttmann, M. D., Ph. D. ①Clinical Professor of Psychiatry, Albert Einstein College of Medicine ②セミナー、講演 “Group Psychotherapy perspective” ③1994. 8. 28~8. 31 ④精神医学教室
- Hae Ahm Kim, M. D., Ph. D. ②セミナー、講演 “Tao oriented psychotherapy with East Asian patients” ③1994. 8. 28~8. 31 ④精神医学教室
- Alexander S. McNeish ①Professor of Paediatrics and Child Health, University of Birmingham, U. K. ②講演 “Recent Advances in Inflammatory Bowel Diseases” (総合研究所主催) ③1994. 9. 1 ④小児科学教室

- 山田 徹 ①Professor, Department of Neurology, Division of Clinical Electrophysiology, Iowa University, U.S.A. ②講演「睡眠中の異常行動—ビデオ・ポリグラフによる分析」 ③1994. 10. 24 ④小児科学教室
- 崔 堯元 ①上海医科大学中山医院脳外科助教授 ②院内見学 ③1994. 8. 10 ④脳神経外科学教室
- Chen Chun Siang, M. D. ①Dept. of Neuro-radiology, Mount Sinai Medical Center ②講演 “Microsurgical anatomy of cranio-vertebral junction” ③1994. 9. 21 ④脳神経外科学教室
- Leo Whiteside ①Professor, Biomechanical Research Laboratory, Barnes Westcountry Hospital, St. Louis, Missouri ②講演「最近のTKAのトピックスについて」 ③1994. 8. 8 ④整形外科教室
- 張 勤松 ①中国・中国医科大学眼科 ②福岡大学病院眼科外来及び手術見学 ③1994. 10. 19~10. 20 ④眼科学教室
- Suchitra Prasansuk ①ENT Dept., Faculty of medicine, Siriraj Hospital, Mahidol University, Bangkok, Thailand (医師) ②講演「アジア・オセアニアにおける難聴問題と対策—バンコク聴覚センターの活動について」 ③1994. 8. 8 ④耳鼻咽喉科学教室

## 福岡大学医学会総会・例会の報告

- 日時 平成六年七月二十八日(木) 午後三時~午後五時
- 場所 福岡大学医学部臨床大講堂
- 第17回総会
- 議事
- 1、報告事項
- 2、役員改選
- 3、平成五年度会計報告ならびに平成六年度予算(案)
- 4、その他
- 第31回例会
- 講演
- 1、座 長 江崎 廣次 教授 「ATPの遊離機構とその細胞外作用」
- 2、座 長 利谷 昭治 教授 「皮膚疾患におけるサイトカインの関与」
- 3、座 長 白川 光一 教授 「テキサス大学に留学して」
- 産科婦人科学 和泉 秀隆 講師



昭和五十七年三月福岡大学医学部卒業後福岡大学病院脳神経外科医局に入局しました。その後途中で一年間福岡東病院内科で研修致しましたが、残りの十二年間は福岡大学病院、白十字病院、筑紫病院の脳神経外科で研修させていただき現在に至っています。私の人生において大きな転機は、福岡東病院の一年間であったと思われまます。この時出会いました九州大学II内科出身の吉田先生、現在も院長をされている飯野先生、現在開業されていますが中富先生の三人です。三人の先生に脳循環の基礎及び、研究とはどういふものかを指導していただき、はすかしながらこの時自分の考えで初めて全国学会で発表する機会を得ました。又そこで他の大学出身者と討論できる喜びも学びました。その後福岡大学筑紫病院へ昭和六十三年に赴任し、脳神経外科認定医試験に平成元年に合格し、その後、朝長正道教授及び田中彰助教授の指導の下に学位を修得することが出来ました。私の専門は、くも膜下出血、脳梗塞(脳主幹動脈閉塞)高血圧性脳出血に対する脳循環動態の研究です。最近では脳卒中学会や脳循環学会等で、脳神経外科の先生より神経内科の先生と討論できることが刺激になりかつ喜びになっています。今後福岡大学出身者として恥ずかしくないように頑張りたいと思いますので、指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

吉永 真也

(三頁の続) なにかとお世話になることと思いますが、ご指導の程宜しくお願い致します。